# 開かれた「窓」への感謝とともに

## ―法学部・市民講座・『更級日記』―

和田律子

### はじめに

令和二年〈二〇二〇〉三月十三日（金）の午後、流通経済大学新松戸キャンパス一号館十三階特別会議室において、三月末に定年を迎える私のために、法学部主催の「定年退職記念座談会」を実施していただいた。

定年にあたり、最終講義や記念講演等が行われることは、世間では珍しいことではないのかもしれない。私の場合も、有り難いことに前年のうちから退職記念の何かをとのお話はいただき、学部長はじめ諸先生方から何度もご慫慂いただいていた。しかし、年の初めから新型コロナウイルスの感染が拡大の一途をたどり、世の

中は行動様式にたいする意識が急変、大学も卒業式の開催さえ危ぶまれる時期であった。諸事情を考えると、ご辞退が妥当ではないかと思い、お気持ちだけありがたくお受けして終わろうと考えていた。

ところが、法学部では、三月十三日と日程まで定め、事務所の皆さまに感染防止の対策についてのご協力も事前にお願いし、万端のご準備を整えて、学部としては実施の方向とのご連絡をくださった。

当日は、広い会議室で、人数も限定され、感染防止策が講じられたうえで、法学部の先生方はもちろんのこと、他学部の先生方にもお越しいただいて、「座談会」形式で本稿の表題にも掲げた内容を中心に拙い話をお聞きいただいた。緊張しつつも和やかなひと時を味わわせていただき、ありがたいことであった。

その後、日本では新型コロナウイルス感染症の急速な拡大による非常事態が続き、結局卒業式も入学式も中止となり、今日に至っている。いま思えば、「座談会」も、あと数日遅かったとしたら実施は困難であったのではないだろうか。そして、私にとっての大切なあの時間は幻となって終わってしまったことであろう。

それを思うとき、あのときの野尻学長のご配慮と信太学部長の確固たるお考えに基づくご判断、諸先生方の熱心なご慫慂と職員の皆さまのお心のこもった周到なご準備に、心よりの感謝を捧げたい。

私が流通経済大学に赴任したのは、平成十一年〈一九九九〉四月であった。当時はまだ法学部は開設されてはおらず、流通情報学部所属の教員として、初めて大学人としての歩みを踏み出した。

そして、平成十三年〈二〇〇一〉四月、法学部開設とともに法学部に移籍して以来、二〇二〇年三月までの二十年近くの歳月を法学部の一員として過ごしてきた。私の専門領域は日本文学で、それも平安時代（十一世紀中心）の文学文化を中心に扱っている。法学部とはほとんど接点のない世界で、初めのうちは、法学部の先生方の「言葉」が理解できず、教授会や各種委員会開催前後のとりとめもない雑談や、研究室の廊下やコピー室等での先生方との立ち話の機会が、私にとっては「法学」に関しての新鮮な学びの場となった。それがどん

なにか学生たちとの会話に活かされたことだろうか。そして、学生たちとの距離を近づけてくれたことであろうか。まさに、「門前の小僧」の重要性を痛感した日々であった。

このようにしてはじまった法学部生活の思い出は尽きないが、振りかえると、流通経済大学と法学部という新しい「窓」をとおして、いくつもの不思議な縁と出会い、それが研究教育活動はもちろんのこと、社会的活動等の場において、大きな力を与えていただけたように思う。とくに、法学部という新しい「窓」をとおして深めることのできた知見は、私にとって貴重な糧となった。

その一端を、座談会の折の内容を中心にご披露して、感謝の気持ちに替えさせていただこうと思う。

## 市民講座と「源氏物語を楽しむ会」の成立

着任後、大学の仕事として初めて担当したのは、各学部が交替で担当して定期的に開催されている市民講座の講師であった。授業で話すことには多少は慣れていたが、大勢の市民の方々の前で話すことは初めてで、緊張の連続であった。以後、龍ケ崎市との連携企画の市民講座の講師を何度か経験することをとおして、大学の社会的役割についても少しずつ理解を深めることができるようになっていった。そのようななかで、市民の方から継続講座のご要望が寄せられているが、との事務局からの打診があり、大学と龍ケ崎市のご助力を得て、市民自主講座の講師を務めることになった。「源氏物語を楽しむ会」の誕生（平成十五年〈二〇〇三〉）である。（当会は、現在でも月一回のペースを崩さず、龍ケ崎市民を中心にした近隣地域の方々の運営で継続している。今年は五月まで休会、六月以降はオンライン講座として実施中）。当会は、大学と法学部はじめ関係諸部署のご理解をいただき、キャンパス内の教室で実施してきたが、市民の皆さまの学生に寄せる眼差しの温かさに心打たれること再三であった。これを機縁に、市民の方々の学園祭「つくばね祭」への参加もはじまり、授業で

短歌を扱った年は、学生と市民の方々の「みやびな真剣勝負―歌合わせ（＝現代の紅白歌合戦）」を実施したこともあった（二〇〇六年〈平成十八〉）。またおなじく学園祭で、中国食文化研究家の古田朱美先生とお茶をテーマにした講演会「中国と日本の文化交流」（二〇〇七年〈平成十九〉）を実施し、茶道部と市民の方々との、お茶をとおしての交流が生まれたこともあった。このような活動をとおして、授業の場ではなかなか見ることのできない活き活きとした学生たちの笑顔や市民の方々の大学に対する親愛の情に触れ、大学の社会的役割について、さらに考えさせられるようになっていった。

## 二　新松戸キャンパス開校と国文学者岩佐美代子氏

流通経済大学は新松戸キャンパスを開校（二〇〇四年〈平成十六〉）、法学部も両キャンパスでの活動が始まった。新キャンパス開校直後から、松戸市との連携で市民講座が開講されたが、私も講座を担当した。そこで取り上げたのは『枕草子』で、和歌文学研究の第一人者岩佐美代子先生（当時、鶴見大学教授）の『枕草子』に関する学問上の大きな発見について、御著書も示しながら紹介した。岩佐先生は古典文学研究者の間では「超」がつくほど有名な研究者で、私なども学生時代から雲の上の大先生というイメージの方だった。受講者の皆さまも岩佐先生の新説について、感動の面持ちで聞き入ってくださった。その講座が終わり、教室を出ようとした私は、受講者のお一人から声をかけられた。そのご婦人は、私が手にしていた岩佐先生の御著書を見ながら、「岩佐美代子は私の伯母です」とおっしゃった。頭がまっしろになるとはあのこと、今でも、こうして思い出していても、あのときの驚きが甦る。驚いたとかびっくりしたとか、そういう感情とは次元が違う。私は何を話しただろう…鼓動が突然速まり、その方に何とお答えしたのか、思い出すこともできない。

それがご縁で、岩佐美代子先生は、新松戸キャンパスで二度もご講演くださった。とくに、二度目は、岩佐先生のご仲介で、最近の即位の礼、立皇嗣の礼等でも使用された伝統的装束の保存研究をしている「有職文化研究所」会頭仙石宗久氏による伝統的装束の「着装実演」と岩佐先生の講演「源氏物語の衣裳」が実施され、開校間もない新松戸キャンパス講堂は市民の方々の熱気であふれた。

ところで、岩佐美代子先生は、既述のように日本の和歌文学研究者として著名な方であったが、講座実施にあたっての事前報告として提出した略歴の、

父は民法学者で東宮（現上皇）大夫穂積重遠　母は陸軍大将児玉源太郎女仲子
祖父は穂積陳重　陳重妻は渋沢栄一長女歌子　（傍線和田）

の部分に法学部の先生方のご関心が集まった。略歴には、岩佐先生が「昭和天皇第一皇女照宮成子内親王のご学友として幼少時より十五年間奉仕」したという一行もあった。

それをご覧になった先生方の懇切なご解説により、私は、「和歌文学研究者岩佐美代子先生」という方が、日本の憲法や民法に大きな功績を残した著名な法学者穂積家の方で、渋沢栄一敬三とも深い縁戚関係にある方であるということ等を知った。そういえば、岩佐先生は、講演にいらしてくださったとき、「おみやげ」とおっしゃって和本一冊をくださった。それは、塙保己一がまとめた『群書類従』（国文学歴史学研究等における基礎文献のひとつ）のうちの一冊で、表紙には「青淵文庫」の印があった。「青淵」が渋沢栄一氏の号であることは知っていたが、それを「おみやげ」にくださった深い意味は、当時の私には理解できなかった。のちに、既述のように法学部の先生方のレクチャーを受け、岩佐美代子先生の別の側面を知った。そして、本学と渋沢家との深い関係を併せ考えたとき、「青淵文庫」のおみやげを用意してくださった岩佐先生の深い御配慮を理解した。「おみやげ」は、後日、図書館に寄贈された。そのようなことを経て、私は、それまでの岩佐先

生に対する畏敬の念には変わりはないが、それとともに雲の上の方との認識とは異なる、ご縁につながる親愛の情をも感じるようになっていった。

## 三　学部開設十周年記念と祭魚洞文庫『百人一首』

法学部は、二〇一一年（平成二十三）に開設十周年を迎えた。学部紀要『流経法学』は「法学部開設十周年記念号」を編み、拙稿も提出するようにとのことであったが、記念号にふさわしく、かつ、法学部と接点のあるテーマ設定には苦慮した。そのとき、着任時に図書館で渋沢敬三氏旧蔵文庫の説明を受けたことを思い出した。特別文庫「祭魚洞文庫」の存在である。ほとんどが社会科学系の蔵書である「祭魚洞文庫」中には多少の文学資料も含まれていて、とくに『百人一首全』という和本は非常に珍しい書であると、当時の図書館職員の方々から伺ったことも思い出した。当時は何気なく伺っていたことであったが、和歌文学研究者岩佐美代子先生の別の側面を知った私にとって、この資料は親しみを感じる資料になっていた。そこで、専門外ながら本格的調査を開始し、ようやくの思いで原稿化したのが、「流通経済大学所蔵　祭魚洞文庫『百人一首　全』」（『流経法学』第十一巻第二号、二〇一二年一月）であった。

岩佐先生のご講演をきっかけに、法学部の先生方の手ほどきによって私の皆無に近かった「法学・法学部」と穂積氏一家についての知見と視野は急速に広がり、それが渋沢家ゆかりの「祭魚洞文庫」への関心ともつながり、私の専門分野へもふたたびつながるという、大学と法学部によって開かれた「窓」を通り抜けた後にたどり着いた予期せぬ成果であった。

なお、「祭魚洞文庫」については、元学長島田孝一先生の「流通経済大学所蔵『祭魚洞文庫目録』序」（昭和

四十八年二月、流通経済大学私家版）と、元職員高木征三氏「祭魚洞文庫について」（『流通経済論集』ｖｏｌ・６　Ｎｏ・２　ｐ・１２９）のご論考をご参照いただきたい。「祭魚洞文庫」がいかに貴重な文庫であるか、両氏の詳細なご解説により理解することができる。また、『百人一首　全』については、拙稿発表時に、併せて、『ＲＫＵＴｏｄａｙ』（19号、二〇一二年春）に、「【特集】祭魚洞文庫に伝わる百人一首の世界」としてカラー画像を掲載させていただいた。それにより、彩色の美しさもご紹介できてありがたいことであった。また、法学部非常勤講師中村弘道氏（浮世絵研究家）により、絵画資料としての当該本の希少性についてのご高論も発表され（「祭魚洞文庫本『百人一首全』に関する若干の考察」『流通経済大学論集』巻第51巻第２号、二〇一六年十月）、本学図書館にそのような素晴らしい資料が蔵されていることに改めて気づかせていただけた。

ところで、岩佐美代子先生の父君で法学者穂積重遠氏の百人一首蒐集は文学研究の方面でも有名で、『小倉百人一首類書目録』（読律書屋　大正十二年十二月）、「百人一首物研究―蒐集目録抜萃―」（新潮社　日本文学講座19　昭和三年）という御著書がある。岩佐美代子先生のご高論のなかにも「（四月十三日の空襲）父の集めた百人一首のもじりの本の蒐集を、全部焼いたのは可哀相でした。それだけは本当に、父もがっくりしていました。あと何も言いませんでしたもの。それは異種百人一首というので、江戸時代に面白い板本が、いっぱい出てるのね。父はそういうものが、好きでしたから。」とあり興味深い（『岩佐美代子の眼―古典はこんなにおもしろい』笠間書院、平成二十二年）。穂積重遠氏（妻は渋沢栄一女歌子）と渋沢敬三氏はいとこ関係にあり、民俗学等に深い関心をもつ敬三氏とは親密な関係にあったという。ことによると、渋沢敬三氏と祭魚洞文庫の『百人一首全』とのあいだにも何らかの関連が考えられるかもしれない。

## 四　新松戸キャンパス開校から『更級日記』千年紀へ

そのような、「窓」にみちびかれての不思議な縁の広がりは、新松戸キャンパス開校以後もいくつもできていった。そのなかでも、『更級日記』を専門に研究してきた私にとり、常陸の国茨城県―龍ケ崎キャンパス、房総の国千葉県―新松戸キャンパスという東国との縁は印象的である。

私は十一世紀を中心にした日本古典文学、とくに『更級日記』とその時代の文化世界について長年考えてきた。『更級日記』は、作者の東国からの上洛の旅の記から始まる作品である。じつは、二〇二〇年は、作者の上洛の年からちょうど千年という節目の年に当たっている。『更級日記』に携わる者にとっては重要な意味を持つ年である。しばらく前からそれを意識してはいたが、華やかでもない小さな作品であることもあり、心の中でひそかにその日を祝いたいと思っていた。しかし、新松戸キャンパスが開校し、松戸市や新松戸周辺地域の方々との交流が深まるにつれ、私の心に変化が生じはじめた。もう十年位前になるだろうか、何かの用で新松戸キャンパスの事務所に行った時のことである。事務所の奥で来客と話していた職員の方と偶然目が合った。と、突然、名前を呼ばれ、来客に引き合わされた。松戸市役所の方で、市民講座の相談にいらしたとのこと、市の希望で『更級日記』の講座を担当してくれる人を探しにいらしたという。職員の方は、「ぴったりです！」と担当者に私を紹介なさった。思えば、松戸もふくめ千葉県湾岸沿いの地域は、まさに『更級日記』千年紀に深くかかわる地域である。とくに、新松戸にほど近い「矢切の渡し」付近は、「まつさとの渡し」として、古代交通の要衝地として有名であったし、『更級日記』にも出てくる地名である。『更級日記』は、上総（現在の市原市）で父の国司の任務が果て京都に戻る作者（十三歳）の旅の記から始まっている。「まつさと」以外も『更級日記』には、千葉市をはじめ市川や幕張のあたり、江戸川隅田川のあたり、と新松戸キャンパス周辺

の地名が列挙されている。松戸の市民講座としては、地元に深いかかわりのある作品として欠かせない作品であろう。うかつにも、当時の私は、松戸市の市民講座と『更級日記』がまだ結びついていなかった。そのような経緯を経て講座を担当してみると、「まつさと」に自負と愛着をおもちの方々の多さ、その方々の土地にたいする思い入れの強さ深さを実感させられ、研究書からのみでは理解しきれないさまざまな知見を受講者のみなさまからたまわることができた。地の利、地縁、地元愛、それが作品を考えるうえでいかに重要であることか、私はこの講座をきっかけに考えるようになった。その後も市民の方々による自主運営講座であったり大学との共催であったり、形式はさまざまであったが、松戸市を中心にした『更級日記』関連講座には何度も関わることになった。

そして、千年紀を翌年に控えた二〇一九年秋には、新松戸キャンパス講堂において、「『更級日記』東国上総（市原市）から出立千年紀記念講座」が開催され、外部から講師の方々をお招きしてのシンポジウムも実施された（「更級日記の世界―上総国〈千葉県市原市〉から上洛千年紀―」、十月二十六日～十一月十六日〈全三回〉）。印象的だったのは、松戸市近隣の方々はもちろんだが、古代の上総国府の地市原市をはじめ千葉県各地から参加してくださった方々もいらしたことで、新松戸キャンパスの開かれた「窓」の先に広い地域とのご縁が深まったことを実感した。そのような経験に背中を押され、私事ながら論集『更級日記　上洛の記千年紀―東国からの視座』（武蔵野書院、二〇二〇年七月二十日、福家俊幸氏と共編）の刊行にいたった。「窓」はどこまでも広がっているのだと改めて感じた出来事であった。

まさか、着任早々に大学の業務の一環として担当した市民講座が、形を変えつつも退職の日まで続くとは。まさか、若いころから畏敬の念をもって仰ぎ見ていた和歌文学研究者岩佐美代子先生が法学部に縁の深い穂積

家のお生まれで、流通経済大学と日本通運に縁の深い渋沢栄一にもつながる方でいらしたとは。そして、まさか、そのような縁がさらに、渋沢敬三氏旧蔵の大学図書館特別文庫「祭魚洞文庫」のなかの一冊『百人一首全』との出会いにつながるとは。（その本は、もしかすると、岩佐美代子先生の父君穂積重遠氏とも縁があったかもしれないのだ）。そして、その『百人一首　全』は、先述の部分では書きそびれたが、後日、『別冊太陽』（浅野秀剛氏「不思議な版本―祭魚洞文庫『百人一首　全』」、『百人一首への招待』平凡社、二〇一三年一月）に紹介されて広く世に知られるようになった、という「まさか」のおまけまでついてしまった。

思えば私の流通経済大学での生活は、大学という「場」が与え開いてくださった貴重な「窓」をとおしての「まさか」の連続であったように思う。その「窓」は、授業の場において、教職員のみなさまとの仕事の場においての、貴重でかけがえのない通路によってその先へとつながり、それぞれが私の人生を彩る大切な宝となった。

本稿では私の専門領域に限定して社会的かかわりを中心に大学での思い出の一端を記したが、大学を離れても、流通経済大学で過ごした二十余年を、折に触れて開いていただいたたくさんの「窓」とその奥に広がったかけがえのない出会いのかずかずとともに、懐かしく思い出すことであろう。そして、「見よ、富士かすみ、筑波晴れたり」の大学歌の一節ではないが、晴れた筑波を思い、かすむ富士を仰ぐとき、流通経済大学で過ごした日々に思いをいたし、これからの人生を深い感謝とともに歩んでいきたいと思う。